

なったのだ。発達障害や境界知能、特に ADHD なんて言葉は近年広く認識されるようになり、また、人々の大きな恐怖の対象でもあったのだ。

日本の平凡な日々に変化は殆どない。音楽から歌詞がなくなり、本屋は自己啓発本やビジネス本で埋め尽くされるようになった。広告やポスターに記号が増え、文字が減った。大学の授業から難解なものが一つ減った。サラリーマンは働くし、ニートは引きこもるし、政治家は偉そうな顔をしているし、メディアは大衆を煽動しようとする。友達は笑っているし、知り合いの知り合いは気まずそうにする。大学の先生は過剰に上から目線な人もいれば、優しい人もいる。日常は何一つ変わっていない。

大学に行くと、いつものように友達と会ったり、サークルの部室に寄りして、授業を受ける。今日も平凡な木曜日だ。僕は用事があつて図書館に行くと、不思議なことに気付いた。この図書館には確か地下なんてないはずなのに、そこには地下への階段があつたのだ。僕は自分が夢でも見ているんだろうと思い、その階段を降った。するとそこには一冊の本もない世界があった。こんなのはますます不思議だと思う自分と、どうせ夢なのだからという自分が混在していた。全くの混乱の中、戸惑って後退りすると、ドンっと何かにぶつかる。

「しっかりせんか、若いの。」

そこには長い長い白髭を蓄えた仙人みたいな外国人の老人がいた。

「ここは……どこ？」

「ここは裏図書館だよ。気まぐれに『詩人』を迷い込ませては、からかっているんだ。これでもわし、詩が好きな人間の間では有名なんじゃが。」

「いや、僕、『詩人』なんかじゃありません！ 詩に興味ありません！」

「おや、とんだ詩嫌いがこの図書館に選ばれたみたいじゃな。」

「おじいさん、詩なんて……怖くないんですか？ 日本じゃ逮捕されるんですよ！」

するとおじいさんはひどく驚き、そして悲しそうな反応を示した。

「そうかそうか、わしは昔、詩を愛した者じゃ。君にわしらが育てた草の種